



日本統治時代が終わり、1949年に中国での共産党との戦いに敗れた蒋介石とともに台湾にやってきた台湾国民政府による、恐怖政治下で戒厳令が敷かれていた時代「白色テロ」。この時代、台湾南東岸に位置する自然豊かな島・緑島には30年以上の間、政治犯収容を目的とした教育施設と監獄が置かれていた。思想改造及び再教育を目的とした「新生訓導處」は1951年から1965年まで設置され、収監された人々は名前でなく番号で管理されていた。

映画のタイトルとなった『流麻溝十五号（原題：流麻溝十五號）』は、身分も年齢も違う女性たちが収容されていた住所である。当時、政治思想犯として拘留されていた者の中には14歳の子どももいた。監督を務めたのは、これまでも一貫してジェンダー平等の視点から数々の作品を手掛けてきた周美玲（ゼロ・チョウ）。高校生・余杏惠（ユー・シンホエイ）を演じたのはシンガーソングライターとしても活動する余佩真（ユー・ペイチェン）。モダンダンサー・陳萍（チェン・ピン）を演じるのは数多くの作品に出演している連俞涵（リエン・ユーハン）。一児の母で看護師でもある嚴水霞（イエン・シュエイシア）を演じるのは、2008年に日本公開した周美玲監督作『彷彿う花たち（原題：漂浪青春）』で映画初出演を果たし、女優業にとどまらず、監督、脚本家、作家と活躍する徐麗雯（シュー・リーウェン）。民主化の道を歩み始めて37年——。台湾初の女性政治犯を扱った映画を日本公開する。

失われた時代をまっすぐ見つめる 勇敢な女性たちの物語

1953年、自由を口にするものは政治犯としてすぐに捕まる時代。政治的弾圧が続く中、罪を課せられた者は思想改造および教育・更生のため緑島に収監されていた。連行された者たちは、名前ではなく番号に置き換えられ、囚人として「新生訓導處」に監禁、重労働を課せられる日々を余儀なくされた。純粋な心を持つ、絵を描くことが好きな高校生・余杏惠（ユー・シンホエイ）。ひとりの子どもが生まれて間もなく投獄された正義感の強い、看護師・嚴水霞（イエン・シュエイシア）。妹を拷問から守るため自首して囚人となった陳萍（チェン・ピン）。次々と迫る不条理に対しても思考は止めず台湾語、北京語、日本語などあらゆる言語を駆使しながら一日一日を生き延びようと過ごす人々。時の為政者は何をしてきたのか。考えることは罪なのか。これまで閉ざされていた歴史に、また一つ光が射す。

彼女たちは「自由な思想」を持っただけで、政治犯として、ある島に送られた



流麻溝十五号

監督：周美玲（ゼロ・チョウ） 原作：曹欽榮（ツァオ・シンロン） 出演：余佩真（ユー・ペイチェン）、連俞涵（リエン・ユーハン）、徐麗雯（シュー・リーウェン）、徐都（シュー・タオ）、莊岳（ジャン・ユエ）
脚本：周美玲 吳見璇（ウー・ミンジュアン） 製作総指揮：姚文智（ヤオ・ウェンチー） 製作：張永昌（チャン・ヨンチャン） 主題歌：青麗雯（ツァオ・ヤーウェン） 協力：廣泰興電影公司 監修協力：江口祥子
日本語字幕：青井哲人・夢菲 後援 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター 配給：太秦 2022年 | 台湾 | 112分 | DCP | 5.1ch © thuan Taiwan Film Corporation 5.1ch

www.ryumakoi5.com

7/26（金）公開

キネカ大森
03-3762-6000
https://ttcg.jp/cineka_omori/